

グリムのメルヒエン集と 伝説集における異界

加藤耕義

序

ヨーロッパのメルヒエンと伝説における異界については、マツクス・リュティの理論によつて説明しつくされた感がある。(二)で取り上げる異界とはリュティの言葉では彼岸である。リュティはメルヒエンにおける彼岸について伝説との比較からその特徴を明らかにしている。

(一)では、グリムのメルヒエン集と伝説集(土地伝説)の中でのように異界が語られているかということを見ていく。したがつて当然ある程度リュティの理論をなぞりながら考察していくことになる。リュティが彼岸について広い事象に通じる的確な言葉で言い表していることが、グリムの伝説集、メルヒエン集の個々の話の中では具体的にどのように表れているかを明らかにしてゆきたい。このふたつのジャンルを比較する際、注目したいのは森の存在である。メルヒエンでは森が多く描かれ、そこで様々な出来事がおきるが、伝説ではあまり役割を果たしていない。そこで

まず、「異界はあるのだ」ということをどのように語つているかについて伝説とメルヒエンを比較したい。

伝説では、異界があるということが伝わつてくる話は三つのグループに分けることができる。そしていずれも異界が強く意識されている。それに対し、メルヒエンでは異界に対する興味はあまり表に出てこない。以下にそれぞれのグループにしたがつて、比較したい。

(一) 異界の存在が、人間の世界にやつて来た。ある場所で異界の存在に出会つた。異界というものはあるのだ。

〈伝説集〉

DS 53 「肉屋に現れた水の精」 肉屋に週一度水の精が現れたので、肉屋が切りつけたら以來水の精はこなくなつた。
DS 31 「こびとの結婚式」 城に住んでいたこびと達が結婚式のため広間に現れた。

これは、異界の存在に出会つたということから、異界があるといふことが類推される話である。もちろん異界そのものの様子は

わからないが、彼岸者が異界からやつてきたのだということ」が強く意識されている。一方マルヒエン集で異界の存在が来訪する話を挙げると次のようになる。

（マルヒエン集）

天国・地獄を連想させる話

KHM 87 「貧乏人と金持ち」

KHM 147 「焼かれて若返った小男」

KHM 189 「百姓と悪魔」

KHM 194 「麦の穂」

KHM 195 「どまんじゅう」

伝説・または伝説マルヒエン

KHM 39 「こびとの話」第一話

KHM 39 「こびとの話」第二話

KHM 149 「うつぱり」

魔法マルヒエン

KHM 1 「かえるの王様」

KHM 14 「糸くり三人女」

KHM 55 「ルンペルシュティルツヒエン」

KHM 161 「雪白と薔薇紅」

まず、神が地上を遍歴する話や悪魔が現れる話が最初のグループである。KHM 87「貧乏人と金持ち」、KHM 147「焼かれて若返った小男」、KHM 194「麦の穂」がこのグループにはいるが、こ

聖者マルヒエン
由来譚・教訓譚
笑話

笑話

笑話

伝説
伝説
伝説

話」第一話と第三話、およびKHM 149「うつぱり」がある。「こびとの話」の第一話はこびとの靴屋の話で、「こびとの世界がある」ということが、はつきりと意識されている。また、第三話は取り替え子の話である。「うつぱり」はどこからやつてきた魔法使いの話で、彼の行う魔術に対する驚きが語られる。したがって、こびとの話では異界が強く意識されている。しかし、この三話はいずれも、ウターが伝説に分類しているとおり、伝説、もしくは伝説的な要素の強い話である。マルヒエン集に収められてはいるが、マルヒエンの異界として取り上げる必要はない。

最後に魔法昔話のグループが挙げられる。「かえるの王様」も「雪白と薔薇紅」も魔法にかけられていた王子が動物の姿のまま人間のもとに現れるが、異界そのものは強く意識されない。魔法にかけられていたこと、魔法が解けたことにもっぱら興味が行く。「ルンペルシュティルツヒエン」も同様に、異界が意識されるよ

れは KHM 35「天国へ行った仕立屋」KHM 82「道楽ハンス」と同じように、ある程度天国というものを類推させるであろう。また同様にKHM 189「百姓と悪魔」、KHM 195「どまんじゅう」といった悪魔の話もKHM 100「悪魔のすだらけの兄弟分」と同じように地獄を連想させるであろう。しかしこれはむしろ「神」や「悪魔」にもともと備わっているイメージからくるところが大きく、筋そのものから異界としての天国や地獄が連想されているのではない。

りも、むしろルンペルシュテイルツヒエンが名前を言い当てられて破滅することに興味が行く。「糸くり三人女」は不思議な女がやつてきて、娘の糸つむぎを手伝い、異常に大きな足と、唇と、平たい親指を王子にみせることで、娘（花嫁）を糸つむぎから解放するという話であり、聞き手は女たちそのものへの興味を強く持つことになる。しかしその後ろにある彼岸世界に対しても、伝説と比較するとあまり興味はもたれないと言える。女たちが登場する場面は次のように描かれる。「そこへ三人の女がやつてくるのが見えました。そのうちの一人は幅の広いペたんこの足をしていて、二人目は下唇があごのしたまで垂れ下がるほど大きく、三目は親指が幅広かったのです。女たちは窓の前に立ち止まって見上げると、どうしたのかと女の子にたずねました。女の子が悩みをうつたえると、女たちは援助を申し出で、言いました：」こ

こでは三人の女の様子が変わっていることは描かれているが、女たちに対する少女の拒絶は表れていない。伝説のDS 53「肉屋に現れた水の精」と比較すると、メリヒエンでの拒絶のなさが、異界を意識していないことと関係していることがわかる。

(二) 人間が異界に行つてしまつて、帰つてこない。異界がそこにはある。

〈伝説集〉

DS 22 「ヒュルンベルクのカール大帝」カール大帝はいまでも二ユルンベルク城の井戸の底にいるということだ

DS 51 「水の精と踊る」見知らぬ若者（水の精）が村の集まりで、ある娘を踊りに誘い、皆の見ている前で踊りながら河にとびこんだ。ふたりの姿は見えなくなつた。

DS 245 「ハーメルンのこどもたち」こどもたちが見知らぬ男に連

いろ。やつが二度とこないようにおれが目印を付けてやる」。さて、水の精が再びやつてきて肉を買おうとする、肉屋がこれを見て、お金を渡そうとのばした指をナイフですばやく切りつけた。すると血が流れた。このとき以来水の精靈はまつたく姿を見せなくなつた。

れ去られた。丘の中の穴に消えてしまった。

これは、異界があることを、人間がもどつてこないことから類推させるものである。たとえば溺死を水の精霊の仕業と結びつけた伝説（DS 54「泳ぎ上手」、DS 61「河への生け贋」）もこの一種である。

こうした話はメルヒエン集にはあまりないが、KHM 43「トゥルーデおばさん」がこのタイプにあたる。好奇心にかられた女の子が親の止めるのを聞かずにトゥルーデおばさんのところに行き、薪にされ火にくべられる話である。しかし伝説と決定的に違うのは、語り手・聞き手の視線が女の子とともに、トゥルーデおばさんのところまでついて行くことである。伝説では語り手・聞き手の視線は当然のことながら、此岸世界で止まっている。むしろこのタイプの伝説に近いのは、KHM 181「池のニクセ」のである。ニクセに捕えられた獵師は妻の努力で戻ってくるが、水の中の世界があるということと、その世界を描写していないという点では水の精の伝説と近い語りである。

これまで、（一）、（二）の型で異界が意識されることはメルヒエンでは稀であると言つてきた。これをリュティは次のように説明している。

伝説では、動物が廐で人間の声で互いに話しているのを聞いて農夫が驚くのに対し、メルヒエンの主人公は野生の動物が話し始めたとたんほつとする。つまり動物を恐れる必要はない。

ないものである。動物は人を食べたりはせず、人は動物と関係を結ぶことができる。又ミノースな不安はかけらもなく、ぞつとすることもなく、たいていはいぶかしく思うことすらない。メルヒエンの彼岸世界は伝説の彼岸世界とはまったく違う性格をもつているのである。メルヒエンの主人公は彼岸世界を知らないし、不気味にも感じない。メルヒエンの主人公は偏見にとらわれることなく彼らと関係を結ぶ。それが動物であれ精霊であれ、みそばらしい女であれ男であれ、自分に話しかけている相手が、その知識や魔法の力をどこから手にいれたのかを考えることはない。死者がメルヒエンに登場するとき、基本的に死者として認識されることはない。^[4]

言うまでもなく、これは一次元性の理論と結びつく論述である。したがつてこれから伝説とメルヒエンを比較していく上で、伝説は此岸と彼岸を厳密に区別した二次元的な世界であり、メルヒエンは一次元的世界であるということが、前提となつてくる。この違いは次に見る（三）の異界に行つた者が戻つてくるタイプでも同じである。しかしメルヒエンに話数が多いことからこの比較が、伝説とメルヒエンにおける異界の語られ方の違いをもつとも明らかにしてくれる。ここではまず伝説の例をひとつ示しておく。

（二）人間が異界に行つてきた。見てきた。

DS 9 「よらずびらきの根」まばゆい王女に導かれ、羊飼いが山の洞穴に入る。入り口の扉に根をつけると、勢いよく戸がひらき、羊飼いは王女から金や宝石をもらう。「最良のもの忘れぬよう」と王女が言うが、羊飼いは根をおいてくる。外へると、ドアが閉まる。羊飼いは富を手にするが、一度と入り口は見つからない。

- (2) かつて人が暮らしていた場所
人の住まなくなつた城、廃墟 DS 10,15,147,159,160
(3) 人が普段はあまり足を踏み入れない場所
丘の大地から銀のわきでる場所 DS 161
山の中腹 DS 162
- (4) 人が本来足を踏み入れることができない場所
鉢山の坑道の中 DS 1,2,3

いうした語りは伝説に非常に多い。伝説では異界の様子や帰ってきた者の運命などが描かれる。メルヒエンでも主人公が乗り越える課題として、異界に行つてくることが多く語られる。しかしメルヒエンでは異界そのものには興味を示していない。以下に人間が異界に行つてきた話で伝説とメルヒエンを比較したい。

水の底 DS 49,52,65,67,69,203,305
河の水が一つに割れ、底の方で大地も口を開け DS 65,69

一 異界への距離

〈メルヒエン集〉

- (1) 物理的に生活圏に近い場所
名付け親の家 KHM 42
呪われた城 KHM 4,81,97
井戸から天上 KHM 24 (ホレおぼれへ)
家の前の地下 KHM 63,116
井戸から地下世界 KHM 91,
城の中から地下 KHM 133
森の中の山の内部 KHM 39(2),142,163,166
水の中 KHM 79,181
- ① 人の生活圏
教会 DS 176
旅館の幽靈がでる部屋 DS 177
大通りのまんなかの大きな家 (こゝりむはなご) DS 279
- 〈伝説集〉

森 KHM 11,103,136,

丘 KHM 182

(2) 時間的、精神的に遠い場所

森の中の家

KHM 9,13,15,22,31,40,46,49,53,55,85,116,123,163,179

森の中（向リハ）の呪われた城

KHM 50,57,62,69,88,93,106,111,121,122,127,137,169,197

森を通つて 天国 KHM 3

森を通つて 地獄 KHM 100,125

川や海の向リハの城 KHM 92,96,113,126,133

川の向リハの地獄 KHM 29,165

③ その他

天国 KHM 35

淨罪界、地獄、天国 KHM 82

太陽、月、星、ガラス山 KHM 26

うるわの家 KHM 66

伝説について、異界のある場所を近い場所から順に並べる」とことを試みると右のようになるが、メリヒエンでは異界を同じ項目にしたがつて分類する」とはできない。伝説に関する言えはりやとは土地にまつわる伝説を対象にしており、異界の出現する場所は具体的に目に見える場所である。伝説が信じらせるなどを前提と

して語られるということから考えても、そうした具体的な場所について語られていることは当然である。したがつて、伝説では距離的な配列が容易である。そして伝説では人が本来足を踏み入れる」とのない場所ですら、時間をかけずに到着する」とがである。それに對し、メリヒエンで生活圏から近いかどうかを問題にすることは難しい。たとえば有名なKHM 24「ホレおばさん」を取り上げてみたい。「ホレおばさん」では女の子は大きな通りの井戸の中へ飛び込む。目を覚ますと、女の子は陽の輝く何千という花の咲いている草原にいる。先へと歩いていくと、パンがいっぱいいまつたオーブンや、いっぱい実のなつたリンゴの木のそばを通る。最後には小さな家に出る。ここで娘が布団をはたくと地上には雪が降る。帰りにはおばあさんが門のところへ送つてくれる。門がしまると娘は地上に出て、家からそろそろ遠くないところにいる。井戸の中がすでに異界と考えれば、異界への入り口は生活圏の近くにあると言える。そしてまた帰つてくるときに門があり、そこが異界との境界であることがわかる。そしてそれは「家からそう遠くないところ」と記述されている。しかしこの話で重要なのは、井戸に落ちたといふではなく、そこからホレおばさんの家にたどりつく過程である。女の子は途中、パン焼きがまからパンを搔き出してやり、またリンゴの木をゆすつてやる。このこと 자체は女の子の善良さを表す描写となつていて、同時に移動の長さを表してもいる。この女の子は地下に降りたはずであるが、布団をたたくと雪がふるのであるから、そこは天上界ということに

なる。この一見矛盾した位置関係を解説してくれるのは、リュテイのメルヒエンにおける彼岸の説明である。

：基本的には「彼岸」、すなわち「別の世界」は天上にあるのでも地下に在るのでもなく、単に遠くに、すなわち「世界の果て」にあるのである。または、大きな水の向こう側にあるのである。ハンガリーの登端句はメルヒエンのすべての出来事をこうした遠方へといざなう。「()の出来事は昔々どこで、七つの国を七回こえて、大きな海の向こうで、そう、ガラスの山よりももつと遠くで起きました」。七羽のカラス(KHM 25)の妹は、遠くのガラスの山にたどりつく。そしてガラスの山を開くために切り落とした指で、ガラスの山を開く。途中彼女は太陽と月に脅かされ、星から贈り物をもらう。しかし、登つたり飛んだりすることは話題にされない。ほかの物語では、太陽と月と風は森の小さな家に住んでいる。ガラスの山はとても印象的な彼岸の山があるので、もっぱらガ

ラスの山のメルヒエンが話題にされる。たとえば大きな森や、王女が竜にさらわれてしまつたといわれる見知らぬ町といった個々の地域はコンテクストによつて此岸の世界に数えるか、彼岸の世界に数えるかを決めることになる。⁽⁵⁾

「ホレおばさん」で地下なのか天上界なのかをまったく問題にしていない語りは、メルヒエンで重要なのは異界が遠くにあるということだというリュティの論がまさに当てはまる。

さて、上記の一覧に従つて、伝説とメルヒエンで異界の現れる場所を比較してみると、城はどちらにおいても異界の現れる場所として共通している。ただし、メルヒエンに出てくる異界としての城の場合は、森の中や森の向こうにある城が多く、そこに伝説の城との大きな違いがある。具体的に文章を比べてみても、遠さがまったく異なつてゐる。廃墟となつた城にまつわる伝説DS 147「ゴッチャエー」は次のように語つてゐる。

その日の晩、獵師は自分の名を呼ぶ声を聞いた。獵師がドアを開けるとその老人が立つており、手招きした。獵師はついて行き、息子と同じ崖まで連れて行かれた。岩が開き、獵師と老人は石の階段を下りて行つた。途中彼らは蛇に出会つた。その後彼らはだんだんと明るくなる靈廟についた。頭のはげた七人の老人が黙つたまま細長い部屋に座つていた。狭い道をさらに進み、丸天井の部屋に入った。：

水の精霊に招かれて、水の中に行く産婆の話も同様であるが(DS 49,52,65,67,69)、この場合もやはり家を出てから城につくまで、さほど時間も距離も感じられない。すぐに目的地に着いた印象がある。それに対しメルヒエンでは、城は森の奥や中にあり、なかなか近づくことができない。たとえばKHM 50「いばら姫」では城より高くのびた茨のために、100年のあいだ誰も城に近くに乗れず、狐がものすごい早さで駆けることで城につく。

KHM 69 「ヨリンデとヨリンゲル」では魔女にさらわれたヨリンデを救うためにヨリンゲルは幾度となく城の周りを歩くが、近づくことはできず、夢のお告げにしたがつて、魔法の花を手に入れるために九日間山や谷を探しまわり、花を見つけてからも、昼夜も歩き続けて城につく。

遠さは必ずしも目に見える距離で決まるのではなく、目に見えていてもそこに近づくことができないということ、時間的にも何ももさまよい、条件を満たさないと近づくことができない」と動物や彼岸者の援助や魔法の道具がなければ近づくことができないことなどによって表される。

さて、この場合は「森」が城との間にあり、近づくことを阻んでいるが、森そのものに注目すると、メルヒエンでは森が出てくる頻度が非常に高い。一方、伝説でも数はさほど多くないが、いくつかの話では森が出てくる。たとえばDS 34「パンを借りるこびと」やDS 46「ツアイテルモースの森」では森はこびとの住処とされる。また、DS 306「シユヴァルツアハ城」では盗賊が森に根城を構えているし、DS 309「永遠の狩人」では森で幽霊が目撃される。したがつて伝説では森は主に異界の住人の住処であり、此岸者が彼岸者に遭遇する場所である。メルヒエンにもそうした森は多く見られる。たとえばKHM 64「黄金のがちよう」では、若者は王に難題を課されて困ると、いつも森に入つてこびとの助けを乞う。森で人が出会うのは、こびとばかりではなく、巨人（KHM 20「ちびの仕立屋さん」）や援助者となる動物（KHM 62

「はちの女王」）の場合もある。では、こうした森は異界なのであろうか。確かに彼岸者が現れる場所であるが、此岸者もそこに足を踏み入れることができる。いわば此岸と彼岸のあいだのグレーゾーンのようになっている。森とはいつたい何なのであろうか。そのことを考えるために次に此岸者がどのように異界にたどり着くかを見てみたい。

三 異界との境界、通路

ここでは異界との境界がはつきりとしているか、異界へ至る道のりは明るいか暗いか、たどり着いた先の異界は明るいか暗いかという点について、伝説とメルヒエンを比較してみたい。

まず、人の生活圏に異界が現れる伝説を見てみたい。DS 176「幽霊教会」の記述はこうなつている。

信心深い年老いた敬虔な婦人が、あるときいつものように、朝早く日の出前、聖ローレンツの早朝ミサに行こうとした。ちょうどいい時間だと勘違いし、真夜中に上の方の市門の前に来ると、門が開いていたので門を出て教会に行つた。そこでは年老いた見知らぬ牧師が祭壇の前でミサを執り行つてゐるのが見えた。大部分の人は知らない人だつた。両側にしばらくに座つており、一部の者には頭がなく、中には老婆の人で最近亡くなつた人もいた。彼女は彼らが生きているころをよく知つていた。⋮

「」ではまず、市門というはつきりとした境界がある。時間は真夜中であるので道は暗いイメージである。異界は常にそこにありのではなく、一時的に出現する。DS 177「幽靈の食事」、DS 279「ユーダーベルク」も同様で、真夜中である。中には明るく灯がともっている。いずれもはつきりと建物の中に入つて行き、ある時間帯にそこが異界となる。

次に、かつて人が暮らしていた場所で代表的なのは、先ほど引用したDS 147「ゴッヂエー」である。そこでは獵師が真夜中に連れ出され、岩が開き、階段を下りていく。奥に進むとだんだんと明るくなっていく。

人が本来足を踏み入れない場所も同様である。DS 3「ハールツの山法師」では、鉱夫が坑道で大男に出会う。

大男は「俺に会ったことを誰にも言つてはならないぞ」と言ふと、拳で左の石壁を叩いた。石壁は二つに割れた。鉱夫たちはすべて金と銀で輝く坑道が延びているのを見た。思いがけない眩しさに目をくらましたので、彼らは目をそらした。再びそちらを覗いてみると全ては消えていた。

この場合、時間は夜である。産婆はまず町と外との境界である門を通りぬける。次に水がはつきりとした異界との境界になつてゐる。そしてさらにもう一つ川底の地面も開くことで境界が強調され、最終的には宮殿が異界であることがわかる。夜であること、川底と地の底へ続く階段という通路から感じられるのは暗さである。そこに「美しい宮殿」が現れる。「美しい」という言葉が明るさを感じさせる。また、先の方では「ニクスは大きな盆にいっぱいの黄金を持っていた。それを美しく明るい部屋で産婆に差し出した」とある。このことからも部屋の中の明るさが印象づけられる。

この場合も暗い坑道で、彼岸の存在に出会い、壁が割れるとそこには明るい別の世界がある。今まで見てきた特徴がもつともつくりしているのはDS 65「ニクスから身を守る薬草オレガノとマルビウム」である。

このように、大抵の場合、異界へいたるまでの道は、夜であつたり、穴であつたり、地下への階段であつたりと、非常に暗いこ

とが多い。そして、暗い道を通っていくと、そこには、何かきらびやかなもの、金や、ガラス、宝石など、きらびやかさが描かれる。DS 41「ランツアウ家の祖先」では、伯爵夫人が夜こびとに起こされついて行く。進むと道は地に入り、着いた部屋には金や財宝が輝いており、たくさんのがびとがいる。またDS 107「助けの岩」では下女が子供をつれて古城跡にいくと、岩が口を開けていて、鉄の扉が開いている。中に入ると、そこは大きな控えの間で奥には扉がある。こざれいな男が戸を開けてでてきたとき、奥でふたつのテーブルに、着飾った男女が座り音楽が流れれるなかで歓談している。このように、異界の明るさが宴で表されることもよくある。その中身については、後に触れた。

このように異界といふことが明確になるのは、ひとつには、暗いところから明るいところにでることでわかるが、もうひとつは、入り口が非常にはつきりしているということが挙げられる。

地が口をあける、水が二つに割れる、洞穴の入り口に入るなど、すでにそれだけで、入り口は明確であり、さらに、ドアによつて境界が強調されることもある。

一方メルヒエンでも、類似の構造が見られる。まず、先ほど挙げた「ホレおばさん」のように、地下世界に行く話、水の中、山の内部などに入る話は境界が明確である。これは主に①の生活圏に近い場所に異界の入り口がある場合である。

もうひとつ境界がはつきりしているのは、KHM 29「金の毛が三本生えた悪魔」である。川の向こうに悪魔の棲む地獄があり、

アケローンの川と同様、はつきりと此岸と彼岸の境界となつてゐる。②の精神的時間的に遠い場所のグループに分類した川や海の向こうの城や、川の向こうの地獄などはこの形になる。しかしこの「金の毛が三本生えた悪魔」の構造をよく見てみると、少年が地獄に悪魔の金の毛をとりに行く途中、二つの大きな町を通る。ひとつは、かつてワインが井戸から湧き出していた町、もうひとつはかつて黄金のりんごがなつっていた木がある町である。これは異界なのか異界ではないかを問うなら、明確ではないが、異界の要素が強いと言えるだろう。「ホレおばさん」と比較すれば、少女が井戸に落ちたあと、歩き始めて、パン焼きがまからパンを搔き出してやり、木をゆすつてリンゴをおとしてやり、最後にホレおばさんの家にたどりつくのと一緒である。ただ、ホレおばさんの場合には井戸に落ちるというはつきりとした異界への入り口が最初にある点が異なるだけである。②のグループに分類されるいわゆる話の多くには森が出てくるが、これは「金の毛が三本生えた悪魔」と同じ構造である。異界かどうかはつきりしない森を時に彼岸者に出会いながらどこまでも歩いていくと、家や城に行き着く。森は伝説の暗い通路の役割も果たしている。KHM 116「青いあかり」では「とうとう兵隊さんは森にやつきました。真っ暗になると、明かりが見えました。その明かりに近づいていくと、一軒の家につきました。その家には魔女が住んでいました」となつてゐる。これは森が伝説の暗い通路に対応しているわかりやすい例である。ただし、このように明かりが見えてそれを追つていく

と家にたどりつくのは、他にはKHM 163「ガラスの棺」へらいで、他のKHM 9,13,15,22,31,49,53,55,85では明かりの描写はない。それでも森はある程度の暗さを印象づけている。

しかしその一方で暗さに対する明るさのコントラストは森が真っ暗でない分あまりない。森の家の場合、たいていは気づくと家の前にいるのであり、家に派手さは感じられない。呪われている

城の場合も、ガラスの棺や指輪など光はあるが、むしろ人のいない寂しさが目立つことが多い。それは、魔法から解放されたときとの関係を考えるとはつきりしてくる。いばら姫で、魔法がとけて初めて城に活気が戻ることを考えれば一番わかりやすいと思う。魔法が解ける前に異界が華やかではコントラストがきかなくなる。

また、明確な境界線ということを正確に見ると、いくつかの話では城の門が出てくることではつきり示されることがあるが、森の中の家の場合は入り口が強調されることはない。これらのことがメルヒエンの特徴となっている。確かに暗い道を通つて目的地の異界に到着するという点では共通しているが、それぞの境界が、森といふものの特性によつて不明瞭になつてゐるのである。

四 むすび

メルヒエンにおける森は伝説の異界への通路に対応するいくつかの役割をもつてゐる。一つは市門の代わりである。森に入ると

いうことは、伝説で市門の外にでるのと同じように、人間の安全な生活圈からの出発を意味している。第二に夜や、暗い階段、暗い坑道に対応するものとしての森である。城を隠すほど生い茂つてゐる森はこの暗さを印象づけるのに役立つてゐる。第三に、徐々に異界深くへと入つて行くという段階的進行を示すのにも対応してゐる。

しかし違ひに注目すると、第一に森は市門ほど明瞭な境界ではない。第二に暗さの程度であるが、夜が強調される場合をのぞけば、伝説の坑道や階段ほど真っ暗ではない。したがつて、小さな光によるコントラストも伝説ほど強くはない。また、そのことも手伝つて、一番奥の異界との境界もあまり意識されない。第三にどんどん奥に入つていくという点では共通してゐるが、その距離離が伝説とくらべると格段に長い。

このことを総合して考えると、メルヒエンの森にはたしかに伝説の暗い通路に相応する役割がある。しかし彼岸か此岸かがはつきりしない。だからこそ、此岸者も彼岸者も自由に行き来ができる、それがメルヒエンを特徴づけている。あえて、彼岸であるか此岸であるかを問うとすれば、それは個々の話において検討せねばならず、流動的である。リュティはこれを次のように説明してゐる。「一次元性の感覚、すなわち此岸と彼岸が補完し合つて一体となつてゐることは、変わり目が流動的であることに支えられてゐるのである。⁽⁶⁾」

さて最後に、異界に行つた此岸者が何を得てくるかに注目した

い。伝説における異界は意外と明るいといふことを指摘したが、

その明るさの中身は逆に非常に暗いものである。異界で宴を行うのは死者たちである。かつての古城の住人などが多いが、その宴に参加した者は死を迎える。伝説におけるもうひとつの異界の光は、金や宝石である。異界を訪問してきたものは指輪や金貨など様々なおみやげをもらってくる。しかし異界からものを受け取つたことを「外すると命を失う」とや、無くすと家が絶えるなどと語られることが多い。

一方メルヒエンでは異界を訪問した者が伝説同様、金銀財宝を得るという話も多い。「ホレおばさん」も「ヘンゼルとグレーテル」もそうである。ただし、伝説とは違い、その宝が不幸を招くことはない。他に魔法の道具を得る場合もある。課題を解決するための道具であり、後で一度だけ使われる。伝説のようには繰り返し使われることはない。そしてなんと言つてもメルヒエンに特有なのは、呪いが解かれることと、婚姻である。呪いが解かれた場合にはその異界は消滅する。これは伝説にはない結末である。伝説では異界は残り続けるのである。

伝説：此岸 → 真っ暗な通路 → 光のある彼岸 → 死・不幸
メルヒエン：此岸 → 薄暗い通路（森） → 薄暗い彼岸 → 幸福

注

- 1 Lüthi, Max: Das europäische Volksmärchen. 10. Auflage, Tübingen 1997.(『ユティ、マックス『ヨーロッパの昔話』小譯俊夫訳)では、冒頭より、「一次元性」についての説明で、伝説における彼岸とメルヒエンにおける彼岸の比較が考察されている。また、リュティの1984年の論文「メルヒエンにおける彼岸と此岸」(Lüthi, Max: Diesseits- und Jenseitswelt im Märchen. In "Die Welt im Märchen", Kassel 1984.)においてもメルヒエンにおける彼岸は詳しく述べられてる。
- 2 『子供もむか家庭のメルヒエン集 (Kinder- und Hausmärchen)』以下に略号はKHMで示す。『ライツ伝説集 (Deutsche Sagen)』以下に略号はDSで示す。
- 3 ハンス＝イエルク・ウター編纂のグリムメルヒエン集 (Brüder Grimm: Kinder - und Hausmärchen. Hrsg. von Hans-Jörg Uther, 1996 München.) 第3卷では、ジャンルの問題についての説明(230頁)にしたがって、240頁以下の索引でジャンルの分類がなされてる。

- 4 Lüthi, Max: Diesseits- und Jenseitswelt im Märchen. In "Die Welt im Märchen", Kassel 1984. 10頁。

- 5 Lähti, Max: Diesseits- und Jenseitswelt im Märchen. 15—16頁。

- 6 Lüthi, Max: Diesseits- und Jenseitswelt im Märchen. (ふるべ・リベヌ／学習院大学外国語教育研究センター)